

1. 「日本→世界事情の試み」

高橋圭子(跡見学園女子大学等)

学部留学生を対象とした「日本事情」の授業において、日本の社会・文化を知ることを通じ、自国や世界について考えることを目指した実践の試みについて報告する。受講生の多くは中国ないし中国系アジアの出身である。取り上げた内容は、人権、差別、民族、開発、平和などである。政治関係に距離を置いていた学生の中から、2015年夏の国会周辺行動に参加し、その様子を報告してくれる者も出た。近年、教室環境や学生の日本語力の低下に苦悩している。

2. 「日本語学習者を対象とした小論文クラスの授業設計 - 内容を深めるためのスパイラルな指導 - 」

山口恵子(桜美林大学)・鈴木秀明(目白大学)

日本語学習者の小論文の問題点として、不適切な問いや不適切な答え、さらに整合性のとれない文章構成などがある。教師は背景知識、文章構成などの面から指導を行うが、学習者が自身の考えを顕在化させるには、学習者間の対話や学習者本人の内省が必要である。しかし、この過程は容易ではない。本発表では上級日本語学習者を対象とした実践を報告する。教師のスパイラルな指導を通して、内容を深めるための小論文クラスの授業設計を検討する。

3. 「広告から社会・文化を学ぶ試みー多様な視点、発想に気づくー」

杉山ますよ(早稲田大学日本語教育研究センター)

2010年からテーマ科目として行っている「広告・コマーシャルを分析する」という授業の実践報告をしたい。制作側が見る人に伝えたいことがあり、それを様々な手法を使い広告、CMで表現している。広告は町に溢れ、いたるところで見られる。広告は社会・文化を反映させるものでもある。授業ではそれらを学生が共に考え、話すことで、様々な視点に気づき、お互いの多様な発想から学ぶこと、また日本語の多様な表現方法や語彙の意味の深さなどを学び、さらに運用できるようになることを目指している。

4. 「アカデミック・ジャパニーズ実践におけるルーブリックによる評価の可能性をめぐる考察ー実践者インタビューを通じてー」

小笠恵美子(東海大学)・木下謙朗(龍谷大学)・大島弥生(東京海洋大学)、

武一美(早稲田大学)・佐藤正則(めいと日本語学院)・三代純平(武蔵野美術大学)

アカデミック・ジャパニーズの実践では、レポートや口頭発表などのパフォーマンス評価の機会が多く、本研究会 Web 報告においても、実践手法、対象などが示されている。し

かし、その評価手法については詳細に記されていないものもある。そこで、評価基準や記述文の学習者への提示と共有を含めた評価の実態を授業実践者にインタビューした。この分析から、AJ分野でのルーブリックをはじめとする評価の可能性を検討したい。

#### 5. 「アカデミック・ジャパニーズ研究報告に関するアーカイブ構築をめざしたタグ付けの試行」

木下謙朗（龍谷大学）・大島弥生（東京海洋大学）・佐藤正則（めいと日本語学院）・武一美（早稲田大学）・三代純平（武蔵野美術大学）・門倉正美（横浜国立大学・名誉教授）・小笠恵美子（東海大学）

アカデミック・ジャパニーズ研究の多様化が進み、その実践報告や研究論文の発表媒体はL2日本語教育・専門日本語教育のみならず、リメディアル教育、L1初年次教育、大学紀要と多岐にわたっている。そのため、教育手法、産出媒体、対象、背景理論においてどのような実践報告が発表されているかの俯瞰は困難になってきている。そこで、AJ実践者に有用有益となるよう、アーカイブ的な検索の容易さを持つデータベース構築をめざし、複数の雑誌媒体の報告に様々なタグ付けを行った試行結果をもとに、AJG会員から使用者としてのフィードバックを得たい。

#### 6. 「授業の目標・目的をいかに学生と共有するか？」

荻谷太佳子（愛知県立大学）

留学生対象の異文化理解科目授業の目標を1) 協働学習を通し、2) 所属コミュニティ（大学及び地域）との関わりを深め、3) 必要なコミュニケーション能力を高めることにおいて、2014年度から実践している。今年度は、昨年度授業実践より授業改善のためにたてた課題「授業の目標・目的を学生と講師、そして学生同士で共有する」に取り組んでいる。コース初めは勿論、毎回の授業や活動の節目で共有する作業が大切であることが確認できた。

#### 7. 「ピアレスポンスで学生は何を評価しているか—自己上達感との関連性—」

ドイル綾子（早稲田大学）・石川早苗（早稲田大学）・柴田幸子（大東文化大学）・伊藤奈津美（早稲田大学）・藤田百子（早稲田大学）

本研究の目的は、某大学で実施されているピアレスポンスについて、学生へのアンケート調査によって以下の点を明らかにすることである。

1. 教師がピアレスポンスを行う際重視している「活動のプロセス（技能面）」「活動のプロセス（社会面）」「メタ認知能力の育成」のうち、学生は何を評価しているか
2. 1の評価要素と学生の「レポートがよく書けるようになった」という実感の有無に  
関係があるか、あるとすればどのような関係があるか

## 8. 「対話の場としての日本語の教室—短期留学プログラムにおける日本語の教室の位置づけを考える—」

古屋憲章（早稲田大学日本語教育研究センター）・加藤駿（早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程）・山口友里恵（コロンビアインターナショナルスクール）

本発表では、大学等で行われる短期留学プログラム（以下「短プロ」）において、日本語の教室が、日本語に関する知識を伝達する場としてではなく、日本語による対話の場として設計される必要性を主張する。主張を展開する前提として、次の説明を行う。

1. 従来の「短プロ」において日本語の教室はどのように位置づけられてきたか。
2. 応募者が「短プロ」内で実施した教室実践「日本語で読む・話す・考える」において、学習者は当該の教室をどのように経験し、意味づけていたか。

## 9. 「LTD話し合い学習法」による要約文と意見文作成の試み」

嶋田みのり（創価大学学士課程教育機構）

LTD話し合い学習方法（以下、LTD）は、仲間との話し合いを通じて文献の理解を深めるのに有効な学習方法の一つで、主に高等教育の授業において取り入れられている。本発表では、日本人大学生 11 名に LTD 話し合い学習法の活動後に、要約文と意見文を書いてもらい、予習ノートとミーティングの発話及び文章を分析する。そして、LTD 活動の前後でどのように理解が変わったかについて考察する。